

ESG経営を目指すBコープの社会的意義と動向（再論）

鈴木 勘一郎 CMA

目 次

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. Bコープの今後の方向と課題 |
| 2. BコープとIC理論 | 5. おわりに |
| 3. Bコープへのインタビュー分析 | |

経営認証を通じてESG経営を実践するBコープが注目されている。世界におけるBコープの企業数はすでに8,300社（2024年3月）を超え、日本でも30社以上と昨年比倍増をみせている。その背景を理解するために、2023年秋に米国カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアのBコープ数社へのインタビューを行った。本稿では、アイデンティティ制御（IC）理論のプロセスモデルを用いてその結果を分析するとともに、今後のBコープ申請に対する審査基準の改定の方角を探る。

1. はじめに

現代のビジネス環境においては、企業の役割は利益追求の枠を超え、社会的および環境的価値の創出に焦点を当てるよう変化してきているといえる。この文脈において、注目されているのがBコープ（B Corporation：B Corp）という経営認証である。

Bコープは、従来の企業が追求すべきとされてきた利益の追求だけでなく、社会的責任や環境的責任をもう一方の経営の軸に据える「デュアルパーパス」経営を志向している。Bコープになる

ためには、Bラボという米国非営利団体によって社会的および環境的基準を十分に満たすか否かを審査され、一定水準を超える必要がある。そしてBコープは、認証後はステークホルダー（利害関係者）に対する責任を公にし、その影響を公開することによって株主のみならず、従業員、顧客、供給者、地域社会、環境などを含む多種・広範囲の利害関係者の便益（Benefit）を考慮した経営を実現することが求められている（鈴木ほか[2022]）。

他方、BコープはESG（環境・社会・ガバナンス）基準と密接に関連しており、持続可能な投資の選



鈴木 勘一郎（すずき かんいちろう）

立命館アジア太平洋大学（APU）国際経営学部名誉教授、(株)エコリング顧問。1978年早稲田大学政治経済学部卒業後、野村総合研究所入社。2001年Gene Networks Inc.（現GNIグループ）を創業。2009年よりAPU教授。1983年米国州立ノースカロライナ大学チャペルヒル校（ケナンフラグラードビジネススクール）MBA取得、2008年早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程修了、博士（学術）。英国CMI認定サステナビリティ（CSR）プラクティショナー。専門は組織論、リーダーシップ論、起業家論、ESG経営など。